

台北日本人学校における国際理解教育の実践

—— 取り組みにやりがいを感じられる交流を求めて ——

前台北日本人学校 教諭

福岡県田川市立後藤寺小学校 教諭 武 嶋 仁

キーワード：現地理解教育、スカイプ、交流、総合的な学習、福祉

1. はじめに

(1) 台湾について

台湾は、日本に非常に近い場所に位置する。東京から飛行機で約3時間という距離で、広さは九州程の大きさである。気候は、島の中央を横断する北回帰線を境に、南部は熱帯、その他の地域は亜熱帯に属している。冬でも温かいイメージがあるが、台北では12℃以下にもなり、ダウンジャケットが必要になるほどである。

親日家が多い国としても知られている。2011年の東日本大震災では、世界で一番多い義援金を送っていただいた。

(2) 学校のこと

平成26年4月13日現在の児童生徒数は、小学部576名・中学部209名、合計785名。学級数は、小学部18学級・中学部8学級、合計26学級である。教職員数は67名だ。世界の日本人学校の中でも、有数の大規模校である。

2. 学年の目標

台北日本人学校での3年間、私は小学部1年生から3年生までを学年持ち上がりという形で連続で担任することができた。

ここでは、最後の年に受け持った3年生の子どもたちを通しての実践を紹介したい。

学年目標	向上心をもって高め合おう ～小さなことからコツコツとそして、高く！より高く！！～
------	--

この学年目標は、社会科見学でも訪問する「台北101」タワーになぞらえたものである。現状に満足せず、それぞれが目標を持ち、「仲間とともに励まし合って高め合うこと」「チャレンジすること」「あきらめないこと」「一つ一つのことを継続して積み重ねていくこと」、などを大切にしながら台北を象徴する「台北101」タワーのように高く高く伸びていこうというものであった。

3. 具体的な取り組みの様子

(1) スカイプを使っての学校紹介

3年生の国語科で「伝えよう、楽しい学校生活」という単元があった。自分たちの学校生活を誰かに伝える、また聞き合うことで、「話す」「聞く」力をのばしていく単元である。

ここでは、お互いが話したい相手、聞いてみたいと思う相手を見つけることが大切だ。そこで、学年内で日本の3年生との交流をスカイプでしてみたらどうだろうか提案してみた。その結果、学年3クラスの内、2クラスは日本の学校と、そしてもう1クラスは、同じ台湾の地にある台中日本人



日本の学校との交流・スカイプを使って

学校との交流をすることになった。私の場合は、日本での所属校との交流であった。

この取り組みには、以下の点でそれぞれに意義深いと考えられた。

＜日本の子ども達にとって＞

- ・世界の存在を実感できる。
- ・台湾を知るきっかけになる。
- ・他の国に暮らす日本人の子どもたちの暮らしぶりを知ることができる。 など

＜台北日本人学校の子ども達にとって＞

- ・台北日本人学校しか知らない子どもたち（クラスの約4割）にとっては、日本の学校はとても興味があるが、実はあまりよく知らない場所なのでそれを知ることができる。 など

交流会当日までに、グループに分かれて発表内容を作っていた。各グループのテーマは以下の通りである。

- 1 主な行事と学校の風景など
- 2 昼食の様子
- 3 社会科見学
- 4 現地校との交流会の様子
- 5 2大行事の様子（全校発表会とスポーツフェスティバル）
- 6 専科の授業について（中国語・英会話・書写・音楽・図工）

交流会当日までの、子どもたちの取り組みはどのグループも大変意欲的であった。インタビューの仕方やスカイプを通しての伝え方のコツなど互いに協力し合いながら、学ぶ姿が見られた。

交流会でも、それぞれの学校との違いについて考えながら話を聞き、発表をする様子が見られた。

台北日本人学校の子どもたちの感想には以下のようなものが見られた。

- ・給食があるということは知っていたけど、カレーやシチューの時に、にんじんのラッキースターがあるというのは楽しみだなあと思いました。当たると、全校放送で発表されるというのもびっくりしました。
- ・弁当もいいと思うけど、給食を食べてみたいです。
- ・休み時間は、僕たちと一緒にすごっこやドッジボールをするんだなと思いました。 など

日本の子どもたちにとっては、自分たちが生活している地域以外にも文化・習慣の違う国々が世界にはあるということは何となく知ってはいても、それを実感する機会はなかなかなかったはずである。

交流会後に手紙の交換も行った。日本の子どもたちからの手紙には、以下のような感想が見られた。

- ・こっち（日本）は、だいぶずしくなってきたけど、台湾はまだクーラーがつけてあったのでびっくりしました。
- ・私たちの学校と同じところもあったけど、違うところがたくさんありました。給食がなくて、お弁当やマクドナルドを注文したりしていて、びっくりしました。台湾に行ってみみたいです。
- ・あいさつの中国語が上手でした。中国語を習ってみたいです。 など

相手校の先生方からは、子どもたちが一生懸命に取り組めた様子と保護者からの反響が大きかったことも伝えられた。

●課題…①スカイプでは、画像が荒く写真が見えづらいつと感じたこともあった。

②自分のクラスでの交流では問題なかったが、他のクラスでの交流会では何度か回線が切れてしまった。

③年1回の交流では、伝える情報が多くなりすぎる。学年の初めから計画して、連絡を取り合い、年2～3回の交流ができると親近感も増し、お互いの理解も深まると感じた。

(2) 蘭雅國小との交流会

毎年どの学年も低・中・高学年に分かれて3つの現地校と交流を行っている。3年生は、相手校に招かれての交流、4年生はこちらの学校に招いての交流となる。

蘭雅國小では、旧正月をテーマに以下の3つのグループに分かれて交流を行うことができた。

当日は、現地校の給食を一緒にごちそうになり、名刺交換や昼寝体験も行う。

中国語を交えての交流となるが、ここでは国際家庭の言葉が堪能な子どもたちの活躍が目立った。

台北日本人学校は、国際結婚家庭の子ども達が多いということが特徴の1つとして挙げられるが、その割合は3割~4割にも上る。そのため、特に低学年においては、中国語の方が得意であるという子もいる。こうした子に対しては、授業からの取り出しや放課後の補習によって、日本語指導も行っている。

そういった現状は課題でもあるが、現地校との交流の場では彼らにとっては自尊心を高めていく大切な機会でもある。また、そういった頼もしい仲間の姿を目の当たりにするのも、他の子にとってはこれからさらに語学を習得していこうとする動機につながるはずである。

学校以外の生活場面でしか、なかなか中国語を使う機会がなく、はじめは積極的になれなかった子どもたちも、名刺交換やペアでの活動を通して、次第に笑顔が多く見られるようになっていった。

子ども達の感想には、以下のようなものが見られた。

- ・旧正月の食べ物には、それぞれちゃんと意味があるんだなということがわかりました。
- ・言葉が思ったより速くて、はじめは聞き取れなかったです。でも、たくさん話そうとしたら友達になれました。中国語をもっと勉強したいと思いました。
- ・日本語を勉強している子がいて、びっくりしました。また、今度会う話もしました。 など

- 課題…打ち合わせの段階でお互いがマンネリ化しないよう、それまでの反省や課題を共有して取り組みを継続していくことが大切になる。

(3) 啓明学校（盲学校）の子どもたちとの交流

3年生では、総合的な学習で福祉を取り扱う。

12月の世界人権週間に合わせて、台北日本人学校では人権集会を行うので、それに向けて取り組みを作っていく必要がある。ここ何年かだと介護の仕方などを学習し、アイマスク体験をして終わるという流れであったが、そこに現地校との交流を通して、多くのことを学ばせたいと感じた。

啓明学校は盲学校である。打ち合わせの時に、相手校の先生が「私たちの音楽を聴いて欲しい」との言葉を述べられた。ここに、その先生方の思いを感じた私たちは、迎え入れる側として「おもてなし」の心で準備を進めていった。子どもたちにもそのことを伝えた。

活動の導入では、目の不自由な障害のある方に対する素直なイメージを引き出した後2つの例を取り上げて、動画で紹介をした。1つは、九州ブラインドサッカー協会のPRビデオ、もう1つは一昨年台北日本人学校にも来校して頂き、素晴らしい演奏を聴かせてくれた辻井伸行さんが世界で賞賛されている動画である。

そこには視覚障害というハンデをものもしないで輝いている姿がある。また、視覚障害がある方とともに楽しみながら歩んでいこうとする健常者の姿が見られる。

マイナスイメージを持っていた子どもたちだが、この授業では以下のような感想が返ってきた。

- ・サッカーはほくもしているけど、ブラインドサッカーをしている人達は、ほくよりもまい人がいた。とてもびっくりした。
- ・辻井伸行さんは、前にあったことがあったけど、目が見えないっていうことを忘れていた。世界中の人からいっぱい拍手されていて、すごかった。 など

ここから「おもてなし」の心でという目標を子どもたちと共有していくことができた。

アイマスク体験を通して、介助の仕方を学習し、視覚障害がある人達とともに楽しむためのプログラムを皆で考えていった。

